「にしまるーむ」利用生徒による作品

「にしまるーむ」へようこそ
学校と地域の連携による中学校内の居場所づくり in 豊島区

発行日　2023年10月31日

発行者　認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
〒170-0011 東京都豊島区池袋本町一丁目28番1号
サンスプレンダーキタイケ 102号
TEL：050-5526-1229　E-mail：info@toshimawakuwaku.com
https://toshimawakuwaku.com/

編集　株式会社ブルーブラックカンパニー
デザイン　株式会社SLEE PRODUCTION
撮影　伊藤泰寛（P6〜9）
協力　豊島区教育委員会、豊島区立西池袋中学校

※この冊子は公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの助成を受けて制作いたしました。


# 「にしまるーむ」へ

## ようこそ

学校と地域の連携による
中学校内の居場所づくり
in 豊島区

## 西池袋中にできた新たな居場所「にしまるーむ」を紹介します

2023年5月にオープンした「にしまるーむ」は、西池袋中学校の生徒が気軽に立ち寄り、思い思いに過ごせる「居場所」です。
子どもたちは運営スタッフに見守られながら、違うクラスや学年の子と一緒に遊んだり、何気ない会話を楽しんだり、宿題に取り組んだりしています。
さまざまな背景をもつ子どもたちが、校内にありながら「学校」とは異なる居場所で安心して過ごすことは、不登校の予防にもつながるものと期待されています。

### 「にしまるーむ」の概要

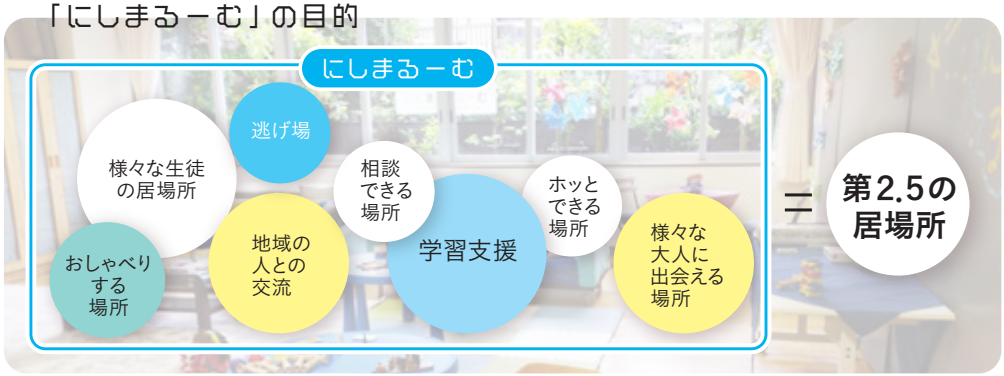
**場所／**西池袋中学校1階ホール　**対象者／**西池袋中学校生

**運営方法／** 定期テストや学校行事の際を除き、原則毎週火曜日に2部制で開設
・第1部：13時30分から15時　教室に入りにくい生徒が利用
・第2部：15時30分から17時45分　誰でも利用

**共催／** 豊島区教育委員会、豊島区立西池袋中学校、認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

**協力／**にしまるーむを応援する地域の方（学校運営連絡協議会の皆様）

### 「にしまるーむ」の目的



放課後の第2部は多くの生徒でにぎわう。

「人生ゲーム」で盛り上がる。

### 豊島区立西池袋中学校

旧道和中と旧真和中の統合新校として2005年開校。生徒数485名（2023年5月1日現在）。令和5年度の学校スローガンは《『誰一人取り残さない教育』を実践・推進し、学力の向上、個性の伸長と社会性の育成を図る》。
不登校対策（未然防止・再発防止、早期発見、早期対応、長期化対応、自殺防止対応を含む）、いじめ対策（SNS問題を含む）を重要課題とし、関係機関と連携を推し進めつつ、わかる授業の実践と居場所づくりに取り組む。校内別室指導室（学習センター・個別学習室）の設営、「にしまるーむ」の設営（豊島子どもWAKUWAKUネットワークとの連携）、自学の場の設営（中高生センター「ジャンプ長崎」との連携）など。

### 認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

地域の子どもを地域で見守り育てるために、「子どもの貧困」をテーマに子ども支援をしている。2012年設立。プレーパーク、子ども食堂（3か所）、無料学習支援、ホームスタート、WAKUWAKUホーム、シングルマザー交流会、不登校の親の会など活動は多岐にわたる。コロナ下では、住まいや仕事の相談、食材の提供（としまフードサポートPROJECT）に力を入れてきた。おせっかいの輪を広げ、地域が網の目のようにつながっていく仕組みを構築している。

## 豊島区初の「校内の居場所」「にしまるーむ」ができるまで と できてから

コロナ禍による生活の困窮や生活リズムの変化は子どもたちに大きな影響を及ぼし、不登校の児童・生徒が激増しています。豊島区も例外ではなく、学校・教育委員会・地域というそれぞれの立場で模索が続いていました。

こうした中、不登校対策として予防支援にもっと力を注ぐ必要性を感じていた豊島区教育委員会が、西池袋中学校と認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークを橋渡し。地域も含めた四者が連携して「校内の居場所づくり」に取り組むことになりました。

### 「にしまるーむ」のあゆみ

| | |
|---|---|
| 2023年<br>3月28日 | 豊島区教育委員会と認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークが「中学生の居場所づくりモデル事業に関する協定」を締結。西池袋中学校をモデル事業実施校に選定 |
| 4月25日 | 校内の新たな居場所として「にしまるーむ」を仮オープン。西池袋中学校のマスコットキャラクター「にしまる君」と、「部屋」を意味する「ルーム」を掛け合わせたネーミング |
| 5月23日 | 「にしまるーむ」オープニングセレモニーを開催。豊島区長・豊島区教育長・西池袋中学校長・WAKUWAKUネットワーク代表・地域代表による挨拶、テープカット、施設見学 |
| 6月20日 | どんな「にしまるーむ」だったら行きたくなる？をテーマに、生徒の声を聴くワークショップを開催 |
| 8月22日 | 「IKEA Family 子ども募金」（イケア・ジャパン株式会社　IKEA原宿　IKEA渋谷　IKEA新宿）の協力により、レイアウトやインテリアをリニューアル |
| 10月 | これまでの週1回開催から週2回開催へ |

利用生徒数　5月22日〜9月19日（全13回開催）　男子生徒 239名 ＋ 女子生徒 236名 ＝ 延べ475名

オープニングセレモニー

オープン時の「にしまるーむ」

リニューアル後の「にしまるーむ」



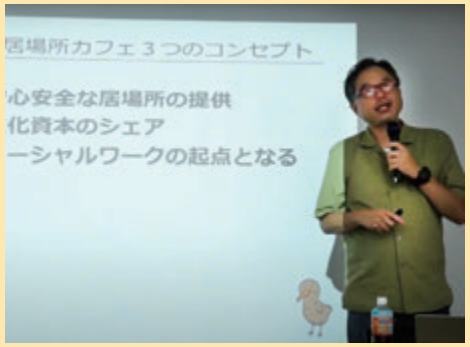
## 講演と報告から考える「校内の居場所づくり」

2023年9月10日、認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク主催のイベント「学校の中に先生や親以外の大人がいる意味と価値―校内居場所カフェの実践から考える―」がとしま区民センターで開催されました。

第1部では、先駆的に「校内居場所カフェ」を立ち上げ、その活動を全国に広げている石井正宏さん（NPO法人パノラマ理事長）が講演。「校内居場所カフェ」の実践例を紹介しつつ、その役割やスティグマ（恥辱）を生まない支援のあり方などについて、説得力のあるお話を伺いました。

第2部は「にしまるーむ」のスタッフによる報告と、利用する生徒さんの声（下コラム参照）。第3部では講演や報告を聞いて思ったこと、感じたことを、各グループに分かれてシェアリングしました。

この日の参加者は定員を超える70名以上。校内の居場所づくりへの関心の高さと、西池袋中から他校へも広げていこうという機運の盛り上がりが感じられ、手応えを感じる1日となりました。




## 僕にとっての「にしまるーむ」

西池袋中学校2年生

昨年、こども家庭庁設立準備室が主催した「こどもまんなかフォーラム」に参加し、小中学生の放課後の居場所について考えなくてはいけないよねという話をしていたのですが、それが自分の通う中学校につくられることになり、うれしかったです。

僕は「にしまるーむ」でけん玉をしていることが多いのですが、テーブルゲームをしたり、絵を描いたり、友達の部活が終わるのを待っていたりと、みんないろんな過ごし方をしています。

「にしまるーむ」は中学生にとっての児童館のようなところです。自分のしたいことができるのは有意義だし、内申点を気にせずに自分のことを話せる大人がいることは大事だと思います。（談）

座談会

# 子ども食堂に続け！ 地域と学校の連携で「校内の居場所」を各地に

**豊島区初の「校内の居場所」として西池袋中学校内に開設された「にしまるーむ」。子どもの居場所づくりに長年携わってきた三人が、この取り組みの意義や課題、今後の方向性について語り合いました。**

## 出席者

### 栗林知絵子

認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク理事長。2004年、池袋本町プレーパークの運営に携わったことをきっかけに地域活動を始める。2012年、地域の子どもを地域で見守り育てるため、仲間とともに同NPO法人を設立。自他共に認める「おせっかいおばさん」。

### 柴（柴本）俊夫 氏

俳優。公益財団法人こどものための柴基金代表理事。1970年代から子ども支援のためのチャリティーイベントを開始。2009年に同基金を設立（当初は一般社団法人）。児童養護施設を出た子どもたちの自立支援施設（シェアハウス）の運営、子ども食堂の支援などに携わる。

### 青山鉄兵 氏

文教大学准教授、独立行政法人青少年教育振興機構 青少年教育研究センター 副センター長。こども家庭庁こども家庭審議会こどもの居場所部会委員。子どもの居場所づくりを推し進めるため、現場と政策と研究の領域を日々行き来している。専門は社会教育・青少年教育。

## 「ナナメの関係」と「複数の居場所」が大事

●**栗林：**2022年春、民生委員の運営協議会で「西池袋中学校訪問時に、校長から『コロナ禍で不登校の生徒が激増している。もはや学校の力だけではどうにもならない』という話があった」と報告を受けました。学校がSOSを発している事態に、地域としてなんとか応えたい。そんな思いから、子どもたちと地域のいろんな人が関わる場、学校とも家庭とも異なる「第2.5の居場所」として開設したのが「にしまるーむ」です。

●**柴：**いま活動紹介のスライドなどを見せていただきましたが、素晴らしい取り組みですね。やはり子ども支援も地域創生も「おせっかい」が大事で、そこから輪を広げていくという方法でやるべきだと思うんです。民意で始めることが行政を刺激し、施策へと結びつける原動力にもなります。

●**青山：**子どもの居場所を校内につくる場合は、学校との連携が重要なポイントになります。「にしまるーむ」は5月に始まり、10月にもう週2日になると伺いました。まさに学校・教育委員会・地域の連携がうまくいっていることの表れですね。

●**栗林：**「にしまるーむ」に来ていた子の言葉ですごく印象に残っているのは、「親や学校の先生以外の大人と話す機会が全くないので、こういう場があるとありがたいし、嬉しい」と。

●**青山：**よく「ナナメの関係」と言いますね。友達同士の横の関係と、先生や親という縦の関係ではない年上の人たちとの関係が、地域における子どもたちの成長を考える上ではすごく重要です。このナナメの線が少ない子たちが本当にたくさんいます。

●**柴：**子ども食堂などでも、やはり高校生や大学生のお兄さんやお姉さんという存在はすごく影響力がありますね。

●**青山：**ちょっと年上のロールモデルになるような子たちとのつながりがあり、また親とは叱られるポイントも褒めてもらうポイントも全然違う大人たちと接することによって、人生の物差しや人間関係が多元化します。

人間関係が狭く、自分の世界がそこだけしかないと、小さなトラブルが大ごとになり、どうにも立ち行かなくなってしまいがちです。でも、居場所が複数あれば、ちょっとしんどいことがあっても、違う場所で話をしたり頼ったりもできます。

### 「校内での居場所づくり」の意義とは

●**栗林：**校内の居場所づくりは中学校より高校の事例が多いと聞きますが、豊島区では区内の高校へ進学する子はひと握りです。それもあり、小中学校の段階で子どもたちが地域とつながる接点をつくることが、不登校を防ぐ上で大きな成果を生むのではと期待しています。
小学校1年生から不登校という子は少ないですし、中学校も学年が進むにつれて不登校が増えていきます。こうした居場所で、早めに誰かとつながってほしいですね。

●**青山：**子ども食堂は「貧困家庭の子どもたちのため」の場所だと言わないからこそ、貧困家庭の子どもも来やすくなるというのが大きな強みですよね。よく「ユニバーサル」と「ターゲット」という言い方をするのですが、障がいのある子や外国ルーツの子、貧困状態の子、虐待を受けている子などへの専門的なサポートはもちろん必要です。でも、誰でも来られる場所に自然と混ざっていられるのも重要で、何も言わずに来られて、知らないうちに支えられているという関係が理想ではないでしょうか。

●**栗林：**私たちが運営している子ども食堂の一つには、かつて90歳近いおばあちゃんがお住まいでした。子どもとおばあちゃん、そして私たちスタッフが月に2回、食卓を囲み続けたところ、やがて介護をサポートしたり、看取りに立ち会ったり、子どもたちもお焼香に来てお別れをするような関係性が育まれたのです。
こういう関わりを、今度は校内での居場所づくりで追求していけたらと考えています。私たちの子ども食堂は全国で2番目に誕生しましたが、今や7000か所ともいわれるほど広がりました。次のステップは、学校というどこにでもある場所での居場所づくりではないかと思うんですよね。

●**青山：**やはり学校は全国どこにでもあって、地域に開かれている場所でもあります。ですから、そこに行けない子たちの問題はありつつも、学校の中に学校でないものを組み込んでいくというやり方は、これからの人口減少社会において子どもの居場所を普及させていくための一つの形だろうと思いますね。

●**柴：**ぜひ全国に広げていきましょう。財源を確保するには地域企業を巻き込むことも大事ですし、小さなイベントを繰り返して著名人のブログで取り上げてもらうとか、いろいろ知恵を絞る必要があります。
ただ、子ども食堂という拠点が各地に存在しているわけですから、そこに働きかけて一緒に取り組んでいきたいですね。もちろん、現場の人間だけでなく、青山先生のような専門家の力も欠かせません。なんだったら僕も一緒に全国各地を回りますよ（笑）。

### 今後へ向けてのメッセージ

●**柴：**子どもたちにとって本当に楽しい居場所をつくるために僕がおすすめしたいのは、アートやカルチャー、スポーツのプロを巻き込み、本物の体験をさせてあげること。学校の先生方も忙しすぎて、部活の指導が負担になっているわけですから、積極的に導入していく意義は大きいはずです。そういう魅力的なプログラムを提供すると同時に、子どもたちの話をちゃんと聞ける大人でいるということも大切にしてほしいですね。

●**青山：**居場所というのはとてもあやふやなものです。場を設けることと、本当に子どもたちの居場所になっているかは別問題で、最終的には子どもたち自身がつくっていくものだと思います。そこにWAKUWAKUさんや校長先生、地域の人たちなどが関わっていくことで、居場所という箱にちゃんと魂が込められていく。そういうプロセスを大事にされているところがとても印象的でした。

●**栗林：**西池袋中学校に続く取り組みを実現させるために、今後ともぜひお力をお借りできればありがたいです。今日はお忙しいところ、ありがとうございました。

（2023年9月29日、HIRAKU IKEBUKURO 01 SOCIAL DESIGN LIBRARYにて収録）

応援メッセージ

# 「にしまるーむ」に期待します

（敬称略）

豊島区長
**高際みゆき**

多様な中学生の放課後を充実させるため、豊島区は、中学生の放課後支援を、「①居場所づくり」「②学習支援」「③部活動支援」の３本の柱で展開しています。居場所、つまりサードプレイスは、悩みの多い生活を送る中学生がほっと一息つける場所として大事だと考えています。区内には中高生ジャンプが2か所ありますが、立地的に行きづらい生徒もいました。そこで、生徒が「授業終わりに気軽に立ち寄れる」をコンセプトに、公民連携で校内設置型として区内で初めて設置したのが「にしまるーむ」です。
西池袋中にとどまらず、今後は他校にも広げていってほしいと思います。

豊島区教育長
**金子智雄**

この数年、不登校となる中学生が増え続けていますが、生徒たちがどんな希望や悩みを抱いているのか、大人たちも分かろうとしている、ということを何とか中学生たちに伝えたいと思い、放課後、気軽に立ち寄れて、友達や先生以外の大人とも話ができる場所を学校の中に作りました。今、「にしまるーむ」に、いろんな気持ちをもった中学生が沢山顔を出してくれて、とても嬉しいです。
校内設置に深い理解をいただいた西池袋中学校佐藤高彦校長、NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークさん、IKEAさん、そして子どもたちを大切にしてくださる地域の多くの方々にあらためて御礼申し上げます。

豊島区立西池袋中学校
校長
**佐藤高彦**

先生と生徒という指導や評価のある関係ではなく、また親子関係のような深い感情は抜きにして「第三の大人」と触れ合えるのが「にしまるーむ」です。ここが生徒たちのくつろぎの場になることで、何かの拍子に学校へ来にくくなっても「あそこなら通える」「あそこの人なら話せる」と思ってもらえることを期待しています。
「にしまるーむ」が校内にあることに大きな意義があると考えます。地域との協働により、学校の教職員がチームとして一人一人の生徒としっかりと向き合い、個々の可能性をいかに伸ばしていけるか、社会に開かれた教育課程を推進して参ります。地域にお住まいの方は、保護者でなくても、ぜひ学校へ遊びにいらしてください。（談）

認定NPO法人
豊島子どもWAKUWAKU
ネットワーク
副理事長
**天野敬子**

不登校・ひきこもりの支援を始めて20年余り。当時高止まりだった不登校数が、ここ数年で一気に増加し、2022年度の調査では、約29万9000人の不登校児童生徒がいることが分かりました。
学校の中に居場所があることは、とても大事です。「にしまるーむ」があることで、元気を取り戻す生徒が一人でも増えることを願っています。

認定NPO法人
豊島子どもWAKUWAKU
ネットワーク
「にしまるーむ」スタッフ
**濱田憲和**

学校や家庭では居場所を見つけられない子にとって、「にしまるーむ」が逃げ場になったらいいなと思っています。僕みたいにあまりパリッとしていない地域のおじさんが楽しく生きている姿を見てもらうのも、意味のあることではないでしょうか。
教育の専門家ではありませんが、勉強に困っている子たちの手助けもしていきたいです。（談）

認定NPO法人
豊島子どもWAKUWAKU
ネットワーク
「にしまるーむ」スタッフ
**本間優輔**

池袋本町プレーパークの活動を支えてきましたが、1つの居場所でつながれる子どもたちには限りがあります。学校という普遍的な施設にある居場所で、より多くの子どもたちにつながれることを期待しています。最近は何気ない会話の中で愚痴や不安をこぼす子もいて、「にしまるーむ」がありのままで過ごせる場所になってきていると感じています。（談）